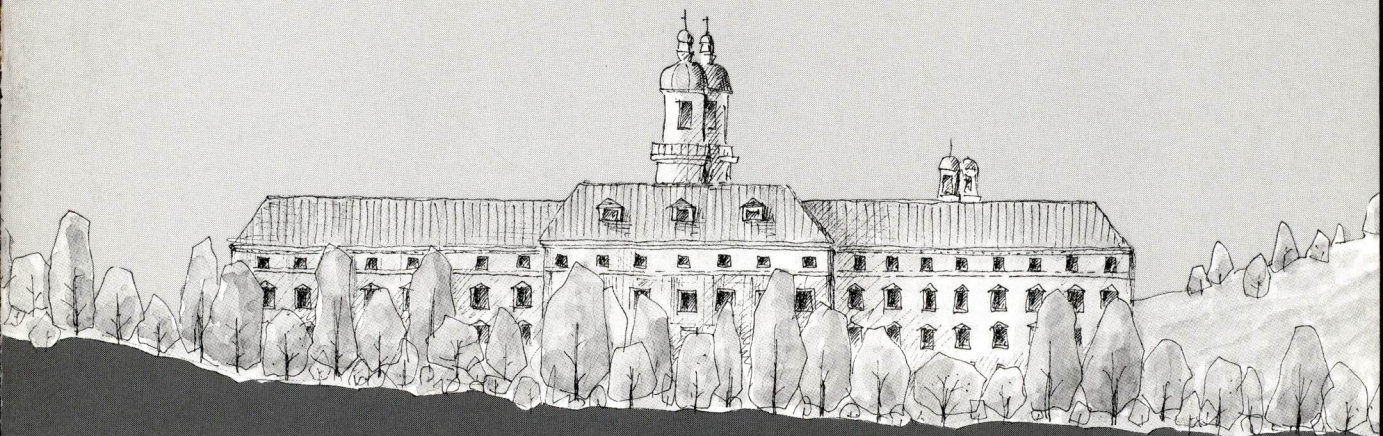


アマチュアオーケストラ

新交響楽団第149回演奏会

The New Symphony Orchestra The 149th Concert



指揮

飯守泰次郎

IIMORI Taijiro, conductor

ワーグナー

歌劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」第1幕への前奏曲

Richard WAGNER (1813-83): Prelude to the 1st act of the Opera "Die Meistersinger von Nurnberg", 1867

ブルックナー

交響曲第8番ハ短調(1892年第2稿・ノヴァーク原典版)

Anton BRUCKNER (1824-96): Symphony No.8 in c minor (2nd edition), 1892

1995年7月30日(日)2:00pm

サントリーホール

Sunday, July 30, 1995 at Suntory Hall (Akasaka)

アマチュアオーケストラ

新交響楽団第149回演奏会

The New Symphony Orchestra The 149th Concert



指揮：飯守 泰次郎

IIMORI Taijiro, conductor

ワーグナー：「ニュルンベルクのマイスタージンガー」第1幕への前奏曲

Richard WAGNER: Prelude to the 1st act of the Opera
"Die Meistersinger von Nürnberg", 1867

——— 休 憩 ———

ブルックナー：交響曲 第8番 ハ短調

(1892年第2稿・ノヴァーク原典版)

Anton BRUCKNER: Symphony No.8 in c minor (2nd edition), 1892

第1楽章 *Allegro moderato*

第2楽章 *Scherzo. Allegro moderato - Trio, Langsam - Scherzo*

第3楽章 *Adagio. Feierlich langsam; doch nicht Shleppend*

第4楽章 *Finale. Feierlich, nicht schnell*

1995年7月30日(日) 2:00p.m.

Sunday, July 30, 1995 at Suntory Hall

主催：新交響楽団

●指揮

飯守 泰次郎

IIMORI Taijiro, conductor

1940年満州生まれ。

1962年桐朋学園短期大学音楽科（指揮科）を卒業、同時に藤原歌劇団公演「修道女アンジェリカ」でデビュー。

1963年から1970年まで読売日本交響楽団の副指揮者を務める。その間、1964年4月の読売日本交響楽団との演奏に対し、1965年、外人記者賞（東京）を受賞。1966年ミトロプーロス国際指揮者コンクール（ニューヨーク）第4位入賞。

1967年から1970年にかけてプレーメン市立歌劇場指揮者兼コーチを務め、1969年にはカラヤン国際指揮者コンクール（ベルリン）第4位入賞を果たした。その後1972年から1976年まで読売日本交響楽団の指揮者となる。

海外での活躍もめざましく、1970年から現在に至るまでパイロイト音楽祭音楽助手を務め、指揮者兼コーチとして1970年から1973年までマンハイム市立歌劇場、1973年から1975年までハンブルグ市立歌劇場、1977年から1978年にはレーゲンスブルク市立歌劇場に籍をおく。

この内外での活躍に対し、1972年には芸術選奨新人賞（東京）と、シーズン最高指揮者賞（バルセロナ）を受賞している。

1978年からエンスヘデ市立歌劇団第一指揮者となり、帰国の1983年まで務め、1979年にはエンスヘデ市立音楽院オーケストラ指揮者となり現在に至っている。

1983年に帰国し、東京都交響楽団定期演奏会などに出演するほか、日生劇場開場20周年記念モーツァルトシリーズで「魔笛」と「コシ・ファン・トゥッテ」を指揮し好評を得た。

最近の活動は全国主要オーケストラとの定期演奏会をはじめ各種演奏会で共演を重ねており、情熱的な音楽創りでいずれも好評を得ている。オペラに対



する造詣も深く、特にワーグナー作品を積極的に日本楽壇へ紹介してきた功績には特筆すべきものがある。

現在、オランダのエンスヘデ市立音楽院のオーケストラ主任教授。

1993年4月より名古屋フィルハーモニー交響楽団の常任指揮者に就任。オランダ在住。

新響とは1993年4月のブルックナーの「ロマンティック」以来、2度目の共演となる。

ワーグナー：「ニュルンベルクのマイスタージンガー」第1幕への前奏曲

兼子尚美（フルート）

Richard WAGNER：Prelude to the 1st act of the Opera “Die Meistersinger von Nürnberg”

「マイスタージンガー」前奏曲というといつも思い起こす話がある。それは、『土佐日記』に記されている、ほんのちょっとしたエピソードだ。時代も国も違いながら、相通ずるものがあるように思われる。

そのエピソードとは、紀貫之が任国の土佐から帰る途中のこと——長い船路、はやく京に帰り着きたいと思う皆の心とは裏腹に、悪天候などで船はたびたび港で足止めをくう。やっとのことで船出だ。船頭には、「船をはやく漕げよ。天気の良いうちに。」と催促をする。船頭がそれを水夫たちに伝えて言う。

「みふねより おふせたぶなり。あさきたの

いでこぬさきに、つなで（綱手）はやひけ。」

（御船からは命令が出たぞ。逆風となる朝の北風が吹かぬ前に、引綱をはやくひっぱれい。）

これはまるで和歌のようだが、船頭が自然にいったことばなのである。意図して“5・7・5・7・7”に歌い出したのではない。——このエピソードからうかがえるのは、一般の民衆（ここでは当時低い身分とされていた船頭）が口にしたことばがすでに歌としてのリズムを持っていた、ということである。

ドイツにおける歌もはたしてそのような類のものではないだろうか。町のパン屋や靴屋が毎日の仕事をこなしながら口ずさむ、ごくふつうのありふれたことばがどんどん歌になってゆく。歌というものは本来、人間の体の奥底にいつも流れているものかもしれない。貴賤長幼を問わず内なるものの表出が、ことばであり歌なのではないか。

しかし、日本の和歌にせよ西洋音楽でいう歌にせよ、それらを作るにはいくつかの決まりごとがある。その決まりを守りながら、いかに自分の感情を込めてゆくかが腕の見せどころとなるのであろう。

今回演奏する前奏曲のあとに繰り広げられる歌劇は、まさにそのせめぎあいを描いているように思える。以下、そのあらすじを紹介しよう。

16世紀のドイツ、ニュルンベルク。青年騎士ワルターはカタリーネ教会で金細工師ポークナーの娘、エヴァに一目惚れをする。ワルターの熱い視線に気付いたエヴァも熱いまなざしでそれにこたえ、2人

は恋におちた。エヴァの婿になりたいワルターだが、父ポークナーは娘の相手を翌日の歌合戦の優勝者に、と考えていた。ワルターはその優勝者（マイスタージンガー）になるべく歌の法則を教わるが、その煩雑さに頭をかかえる。それでも希望は失わず、その日の審査を受けるが、エヴァ獲得を狙うベックメッサーの悪意により失格となる。それを聞いたエヴァは落胆したワルターと駆け落ちを企てるも、靴屋ザックスのはからいによってとりやめる。実はザックスもエヴァに心を寄せていたのだが、ワルターと結ばせてやりたいと思うようになったのだ。その夜、ワルターが見た美しい夢をザックスは紙に書き留め、歌合戦の応募歌にと勧める。（マイスターというのは立派な詩を作り、それに合う新しい音楽をつけられる人なのである。）紙を置いたまま2人が出ていくと、そこへやって来たベックメッサーは紙を手に入れ、その歌詞で歌合戦に出場しようとたくらむ。ところが、本番までに歌詞をきちんと暗記できなかったベックメッサーは、とんでもない歌を披露して人々の嘲笑をかう。一方、かわりに出たワルターはエヴァに対する熱烈な愛に燃えて歌い見事に優勝する。

この歌劇のなかで、ベックメッサーは歌の法則にのっとることを強く主張し、ワルターの歌を失点だらけだとこきおろす。が、最終的にはワルターの情熱的な歌が勝利する。これは、ワーグナー自身が当時批判されていた自分をワルターやザックスになぞらえ、反対にも屈せず新しい歌劇の開拓を背負う自分の姿を描き出したものといわれている。

さて、この前奏曲には歌劇に登場する様々なテーマがちりばめられている。冒頭の高長調全音階によるマイスタージンガーのテーマ、ついでフルートとクラリネットで表される2人の愛のテーマ、トリルの連続による聴衆の嘲笑など。そういった情景とも重ね合わせて、どうぞお楽しみください。

初 演：1868年6月21日、ビューローの指揮によりミュンヘンで。
楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、トライアングル、シンバル、弦楽5部

ブルックナー：交響曲第8番 ハ短調

Anton BRUCKNER：Symphony No. 8 in c minor

土田英三郎（東京芸術大学音楽学部助教授）

第8交響曲はブルックナーが完成させた最後の交響曲であると同時に、彼の最大の作品でもあります。それは単に演奏に1時間半もかかるという物理的な長さのためではなく、構想そのものの巨大さのゆえです。ピアノシモの曲頭から壮麗なラストに至るまでの間、雄大な時間を刻みながら様々な出来事が生じます。しかも、音楽の流れはピンと張られた一本の糸で持続し、少しも弛緩（しかん）することがありません。第9番が完成されていたら、あるいはその座を譲ることになったかもしれませんが、これは19世紀後半の交響曲を代表する作品であり、交響曲の歴史という長い山脈のひとつの頂きであるといっても、決して過言ではありません。

この作品は1887年の夏にいったん完成されたのち、2年半ほどかけて大幅に書き直されています。一般に演奏されるのはこの改訂された第2稿で、本日の演奏もレーオポルト・ノーヴァク校訂による純粋な第2稿によっています。第1稿に比べ、響きはいつそう整理され、全体の造形もすっきりと見通しがよくなっています。ただ、第1稿、第2稿とも、それぞれに魅力的で甲乙つけがたい音楽であることは、強調しておかねばなりません。

なお、第8交響曲は一晩のコンサートをこれ1曲で専有するのが、初演以来の慣例となっています。こうしたプログラミングは19世紀では珍しいことでしたが、曲の内容と密度からいっても当然の配慮でした。初演はブルックナーがかつて体験したことのないほど大きな成功をおさめました。

曲は短調から長調へ、暗から明へ、死から勝利へ、というブルックナーに典型的な図式をもっていますが、言うまでもなく、これはベートーヴェンの交響曲を雛形としています。

第1楽章 ハ短調、ソナタ形式 冒頭第1主題部は、不安気でひそやかな、しかし鋭い動機で始まります。これが変容を繰り返すうちに2+3のいわゆる「ブルックナー・リズム」 $\text{J} \text{J} \text{J} \text{J}$ を孕（はら）んでゆきます。このリズムは幅広い表情の第2主題部（「歌謡楽段」）にも受け継がれます。第3主題部では3連音の連続となり、再び不穏な動きを増してゆきます。このように、いわば鎖（つな）が繋がってゆくように、相前後する主題は連携を保っています。一方、冒頭動機は以後も様々な形を変えて登場し、他の動機とも組み合わせられます。展開部の何度も押し寄せる頂点や、再現部第3主題の最後で迎えるこの楽章最大のクライマックスなどでは、そのリズム型だけが執拗なまでに強調されます。この最後の身の気もよだつようなクライマックスは、ブルックナー自身の解説によれば「死の告知」。コードは冒頭動機の断片が咬（か）きのように繰り返されますが、これは「諦（あきら）め」「死の時計」。ただ、この変転するファンタジーにあふれた音楽は、こうした説明が浅薄に感じられるほど、もっと根源的な世界のイメージをもっています。

第2楽章 スケルツォ、ハ短調 ベートーヴェンの第9番と同様、第2楽章にスケルツォがきます。冒頭で呈示される主題は、ブルックナー自身によって友人の「アルメロート」の主題とか「ドイツのミヒェル」などと呼ばれています。「ドイツのミヒェル」とは「愚直なドイツ男」といった意味で、ドイツ＝オーストリア農民的な、素朴ではあるが勇敢な田園人の理想像を表しています。この主題もさまざまな姿を変えて活用されます。宇宙的でありながら、どこかメランコリーを帯び、どこか鄙（ひな）びた音楽には、オーストリア的な自然への憧（あこ）れが感じられないで

しょうか。変イ長調の中間部はブルックナーの交響曲でも最も魅力的なトリオです。ここで初めてハーブが登場します。どこかコラール風な楽想が敬虔な感情を喚起しますが、ここでも自然への満たされない思いがあります。

第3楽章 アダージョ、変ニ長調 全曲の白眉ともいうべき壮大なアダージョ。形式的にはA-B-A'-B'-A"-コーダのロンドと考えられます。天国的な時間の中を、祈りと憧憬、宇宙の運動、安らぎなど、様々なイメージが繰り返され、最後のクライマックスA"では何かが成就されます。Aは瞑想的な音楽で始まり、やがて上へ上へと向かおうとします。しかしそれはかなえられず、聖歌風の祈りがハーブの奏でる和音で閉じられます。Bはチェロが奏でる情熱を秘めた哀歌で始まり、金管の荘重なコラールが挿入されます。一見なんの関係もないようですが、BはAの素材を引き継いでいます。若干の推移部を経て、A'では大地の鳴動があり、B'は来るべきクライマックスを準備します。A"は幾重もの起伏を形成しながら一步一步高みに登ってゆきます。その途中で第1楽章の冒頭動機が、ヴァーグナーの「ジークフリート」の動機に姿を変えて、一瞬顔をのぞかせます。再び高揚が始まり、その頂点で全てのエネルギーが開放されます。長いコーダでは第1楽章の素材が垣間見られますが、今度は諦めではなく、成就のあとの幸福感が支配しています。

第4楽章 フィナーレ ハ短調、ソナタ形式 第1主題部は、作曲者の説明では、オルミユッツにおける独裁露の三帝会談を表し、弦の刻みは「コサツクの騎行」、金管は「軍楽」と「ファンファーレ」

とのこと。これも衝撃的な音楽の前では霞んでしまう言葉です。この主題は第1楽章冒頭と関連をもっていますが、続く「歌謡楽段」の第2主題部、動きを増した第3主題部も、別の意味でこの主題と素材を共有しています。これらの主題部はそれぞれ印象的なコラール風の楽句を含んでいます。第3主題部の途中で突如、暴力的なまでに推進力のある行進曲（「死の行進」）となります。ここにも第1楽章冒頭のリズムが垣間見られます。様々な気分を孕んだ広大な展開部を経て、再現部でも第1主題の激烈な展開が続行されます。第3主題の再現はそれ自体、大きな起伏を形成しますが、その頂点で第1楽章の冒頭動機そのものが悲痛なまでに激しく再現されます。コーダは、第1主題の鋭い冒頭リズムにより、何かが動き出すような緊張感で始まります。息の長いクレシェンドの最初の頂点で、第1主題にスケルツォ主題が重なります。「ミヒエル」は大天使「ミカエル」となって帰ってきた、というわけです。音楽は輝かしいハ長調となり、ファンファーレの^{たいせき}堆積を経て、最後に全4楽章の各主要主題が同時に組み合わせられ、第1楽章冒頭の動機のユニゾンで曲を閉じます。こうして、長大な音の構築物が完結します。冒頭と結句は全く様相を異にしていますが、完全な対応関係の中にあるのです。

作曲：第1稿 1884年7月～1887年8月10日
第2稿 1887年10月～1890年3月10日
初演：1892年12月18日、ハンス・リヒター指揮、ヴィーン・フィル（第2稿）
出版：1892年3月、ヴィーン：カール・ハースリンガー（第2稿）
献呈：オーストリア皇帝＝ハンガリー王 フランツ・ヨーゼフⅠ世
楽器編成：フルート3、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3（コントラ・ファゴット1）、ホルン8（ヴァーグナー・チューバ4）、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ、トライアングル、シンバル、ハーブ1～3、弦5部（第2稿）

「マイスタージンガー」はドイツ民衆芸術の讃歌！

石川 嘉一（チェロ）

リヒャルト・ワグナー（1813～1883）の70年の生涯の後半は驚くほど強運にめぐまれ、彼の芸術家としての理想実現のため強力なパトロンであるバイエルン国王ルートヴィヒ二世が法外な経済的援助をした。そのおかげで彼は独自の世界を切り開くことが出来た。

「リエンチ」、「オランダ人」、「タンホイザー」の三編の悲劇に続く「マイスタージンガー」は歌合戦を軸とした喜劇（サチュロス）で構想された。その登場人物は神話や伝説のように別世界に住む人ではなく、唯一の市民劇として全員が私達と同じ人間である。

この楽劇がミュンヘンで初演（1868）されたとき、作曲家ペーター・コルネリウスは「ドイツ国民は遅かれ速かれ鏡の中を見入るように、この作品に注目するだろう。」と云い、アルフレッド・アインシュタインは「世界文学の何百という芸術家ドラマの中で、最も美しく、最も豊かで、最も象徴的なドラマである。」と語っている。また楽劇内のザックスの最後の言葉にあるように「神聖ローマ帝国がもやのように消えても聖なるドイツ芸術は残るだろう。」正に言葉で言い表せない喜びのドイツ国民オペラとなった。

誰もがマイスタージンガーの圧倒的な音楽の力に抵抗することは出来ない。堂々たる前奏曲、感動する祝典風な性格、ハ長調を基本に全音階的な作品、そして親しみやすさがある。J.S. バッハの「ヨハネ受難曲」や「マタイ受難曲」を思い出すポリフォニックな音楽。ラストシーンの歌合戦の行われる祝祭広場とベートーヴェンの歌劇「フィデリオ」のラストシーン囚人解放の場。それに「第9交響曲」の終楽章と音楽的にも思想的にも相通するものがある。共にオラトリオ的色彩が強く祭典的性格が強く打ち出されている。このような理由でナチス・ドイツに利用された不幸な過去をもっている。

第二次大戦後50年たった今日でもその影響が感じられる。ウィーン国立歌劇場の2階ロビーには大作作曲家の肖像画が飾ってあるが、R. ワグナーはそこ



新響ベルリン公演を聴きにいらしたヴォルフガング・ワグナー夫妻と

には居ない。その裏側階段ポーチにあった。

ベルリン演奏旅行のとき、私はドイツ人記者と口論した。「日本人はドイツ人同様に R. ワグナーが好きだ。そして必要以上に神化し尊敬している。ワグネルとか、ワグナー協会とか、その運動が熱心で不気味である。」そこで私は「音楽は皆んなのもの」と云う芥川先生の言葉を思い出した。その内容を説明し理解を求めた。たとえ民主主義社会でも社会主義国家であろうと、キリスト教徒でも仏教であろうと、素晴らしい芸術作品は国境を越えて全人類のためにあるのだ。かつ「音楽は皆んなのもの」だと主張した。どうやら彼は東側から来た人らしい。

イスラエルフィルでは戦後 R. ワグナーの作品をプログラムから外していたが、昨年初めてズービン・メータ指揮により演奏された。今やオケ自身も新しい時代を迎えている。マイスタージンガーも最近では民衆劇として喜劇として、脱ドイツを強く意識した新しい人間関係の中にとらえられ、新鮮な演出が期待されている。

わが国でも祝典的な歓喜の曲として「第9交響曲」と並び祝祭音楽として讃歌的に演奏されることが多い。今年も無事に過ごせた神への感謝の気持ちとしての「第9」。マイスタージンガーも大学入学式等の

式典でよく聴くことが出来る。そのおかげで私もこの「前奏曲」を60回以上も演奏が出来た。今日では私達のテーマソングになってしまった。

光栄なご縁でバイロイト音楽祭100年祭（1979）、R. ワグナー没後100年（1983）、W. ワグナーの70歳の誕生記念会（1989）に招かれ、大作曲家 R. ワグナー

の孫であるバイロイト音楽祭総監督の W. ワグナー氏の御前で演奏出来たことは、ワグネリアンの一人として生涯忘れられない幸せな出来事であった。

In alle Ewigkeit, Wagner Familie !
(ワグナー家、永遠に。！)

ブルックナーの時間の流れ

志村 宗治（チェロ）

皆さん新交響楽団の演奏会にようこそ。本日の演目は、長大なブルックナーのシンフォニーです。このブルックナーの交響曲の長さを皆さんはどうお感じになるでしょうか？

僕は学生の頃にもこの第8交響曲を演奏する機会があり、それはそれで十分のめりこんで、いろいろなレコードを聴いたり、また本番もおおいに楽しんだのですが、同時にこんなことも考えていました。それは、こんなに長い曲は、これからの時代にだんだんあわなくなってきた、あまり聴かれなくなってしまうのではないだろうかということで、これは実際、自分の今までの20年近いサラリーマン生活の中ではそのとおりになってしまいました。社会に出て、それも世界で最も速いスピードで突っ走ってきたにちがいない東京という街に生きてきて、それは当然のことであったのかも知れません。

ちょうど一年前、僕は、友人が出演するというので、皆さんと同じようにあるアマチュアオーケストラが演奏する第8交響曲を聴いていました。それは暑い暑い日だったのですが、コンサート会場はとても気持ちよく、冷房が効いていて、つまり猛暑続きの日曜日の午後の昼寝にはうってつけというなかで、

僕は、一睡もせずにとどこか一音も漏らさず集中して聴き通してしまいました。もちろん演奏の水準の高さにも感心したのですが、自分がブルックナーにこんなに集中できたことにも少し驚いてしまったのです。

それは、今まで速くなる一方だった自分の生活のテンポが、少し戻り始めたような感じでした。

これは分析してみると、前の年に僕が少し広い家に引っ越したことや、聖フローリアン（ブルックナーの墓のあるオーストリアの町）に行つてのんびりとした時間の流れを体験したこととか、いろいろ理由があるのですが、それまでの自分のテンポがそれらの体験を通して少し緩められたきたようなのです。これはまたもしかしたら、「バブルがはじけた」などと形容される時代の動きとも関連しているのかも知れません。とにかく東京の真ん中で、ゆったりと夏の午後を過ごすことができたことは幸せな体験でした。

それ以来、穏やかに長い曲に親しむという聴き方が、再びできるようになりました。ゆったりと構えていると、音が入ってくるのです。特に、ブルックナーの、^な嵐いだ大海のような大きなうねりに身を任

せていると、自然と心臓の鼓動や呼吸がゆっくりしてくるのが分かります。ときには、そのままスヤスヤということもあるのですが、それはそれで精神衛生上悪いことではないでしょう。でもその寸前で、輝く太陽のようなブラスの響きや、きらきらと舞う波しぶきのようなバイオリンのトレモロを、なかば無意識状態に感じていると、そこは時間の流れを超えた世界です。

聖フローリアンは、麦畑の中をうねる道が、小高い丘の上の教会に続く田舎の町で、そこには、いまだに100年前のゆったりとしたときが流れているようです。そこに戻る入り口がこの交響曲なのかも知れません。

あなたも速すぎる現代のテンポ、少し戻してみませんか。



アントン・ブルックナー

団員募集！

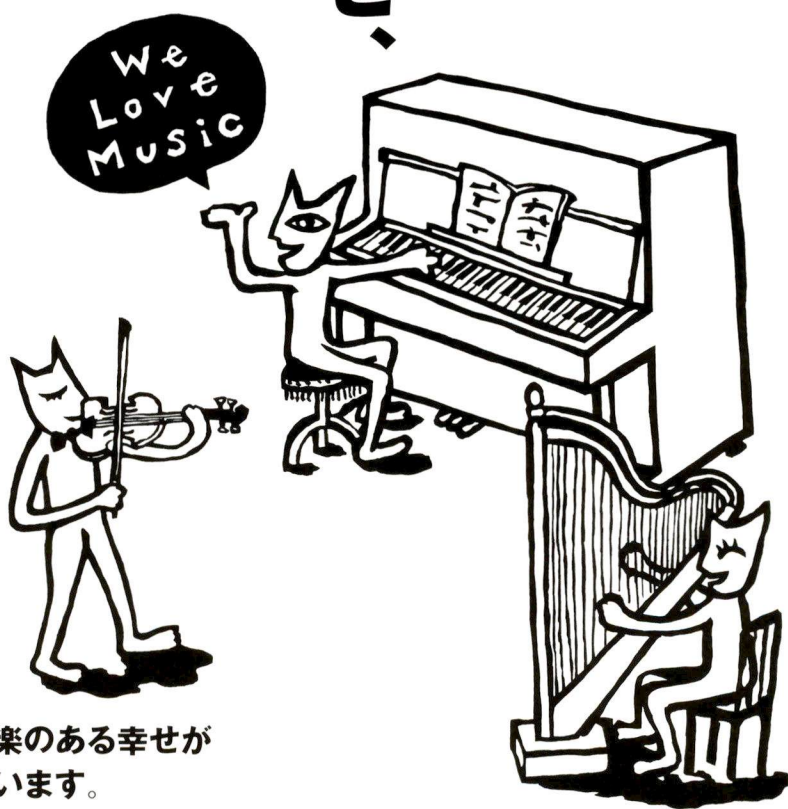
新交響楽団は会社員、教員、学生、主婦などなど、さまざまな職業・年齢にわたる団員で自主運営されているアマチュアオーケストラです。音楽監督の故芥川也寸志氏が長年にわたって主張し続けてきた「音楽はみんなのもの」を実践し、常に新しい視点を持って活動していくために、あなたの力が必要です。何はともあれ、ぜひ一

度練習をご覧ください。いつでも歓迎です。団費：入団費4,000円、団費月額4,000円。練習は毎週土曜午後6～9時、労音十条会館にて。

なお、新響では入団に際してオーディションがあります。詳細は下記斎藤までお問い合わせ下さい。

・連絡先……………斎藤茂樹 ☎043(276)1422

音楽のある幸せ、
届けます。



この先もずっと、音楽のある幸せが
続いてほしい、と思います。
誰もが手軽に、音楽を楽しめるように。
つくる人も安心して創作活動に
専念できるように。
JASRACは著作権の管理を通して、
音楽の未来を守っています。

JASRAC

日本音楽著作権協会

〒105 東京都港区西新橋1-7-13 ☎(03)3502-6551